

創建

そうこん

2014・12・12 VOL.49 NO.3 (通巻153号)

巻頭言：渡部和生・1
 東北建築作品賞等受賞：浦部智義、阿部直人・2～3
 大学院特別講義聴講報告・4～5
 海外研修報告：市岡綾子・6～7
 JIA東北建築学生賞・8
 JIA全国卒業設計コンクール／「日本の自然を描く展」
 上野の森美術館受賞：二瓶博厚・9
 建築作品見学会／現場見学会・10
 発表論文・11
 学術論文／教室ニュース・12

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

東日本大震災から一年目に、共同通信の連載依頼に応えるべく「希望の建築」を執筆し、新聞各社に配信されました。故郷の福島への郷愁と建築への思いを重ね合わせ、希望につながるメッセージを送り、自らの人生を振り返ることにしました。

人は誰でも生きていく起点になる節目＝ターニングポイントに出会うようです。私と本学部との出会いは小学校の遠足でした。「はじめて見る大学」という課題の遠足で、芳賀小学校から工学部までの徒歩の旅は、長く遠く感じました。白い体育着姿で、地面にお座りして、大学生のお兄さんたちが、何故グライダーが飛ぶのかわかりやすく説明してくれたのが印象的でした。それから郡山の母がつくってくれたお弁当を広げました。大きく広がるキャンパスと今にも舞い上がりそうなグライダーのイメージ、それは私にとって初めての工学技術との出会いでした。

やがて建築家として歩み出すきっかけとなる大きな出来事がありました。「新建築」の編集者から電話があり、日本建築家協会のJIA新人賞に応募するということでした。私の作品は、地味な高齢者施設なので、無理があると思いましたが、ポートフォリオを提出すると現地審査まで進んでしまいました。磐梯熱海駅に審査委員の長島孝一氏、岸和郎氏、團紀彦氏が到着しました。とても緊張し、地に足が着かない感じでした。前日スタッフと審査の準備で現地に入りましたが、運悪く台風が来て暴風雨になりました。もう駄目かなと思いましたが、翌日の審査日、台風一過で雲一つなく、「青天は建築を救う」となりました。結果的には坂茂氏の紙の教会、坂本昭氏の白鷺の家、私の老人保健施設・桔梗が新人賞を受賞しました。前日暴風雨の中で審査を受けた作品と台風の後の青天の中で審査を受けた私の建

築とは、僅差でしたが運命を分けてしまいました。

ほぼ同じ頃、大きな節目に遭遇しました。福島県立の大規模な学校の指名コンペに参加する機会を得ました。ビッグチャンスでしたが、私が以前勤務していた事務所の所長さんや大先生方と戦うのは、いかにも無理がありました。今現存する校舎を使いながら、既存の教室位置に新しい校舎を新築するという難しい課題で、全力を尽くして案をつくりました。ヒアリングでは、厳正かつ本質的な質問を受けましたが、緊張のあまり、うまく答えられませんでした。結果的には、私たちの案が当選し、これまでにない大きなプロジェクトにチャレンジすることになりました。

希望の建築

特任教授 渡 部 和 生

寛容な結果に導いた審査委員長は、当時本学科の教授で建築計画の研究をされていた佐藤平先生でした。佐藤先生は今年亡くなられ、告別式で棺を霊柩車に運ぶ時、少し軽く感じられ、悲しみが込み上げてきました。改めてご冥福をお祈りしたいと思います。

その与えられたビッグチャンスを生かし、日本建築学会賞の作品賞に応募することになりました。ポートフォリオから現地審査に進み、審査の前日現地に入りました。日頃の行いが悪いため、今度は16年ぶりの大雪になってしまいました。郡山にしては珍しく大きな積雪となり、薄く納めた屋根の上に、厚い雪の層が重なってしまいました。何よりも、外観を審査する順路が積雪に阻まれ、歩けない状態です。すぐ所員を総動員して、幅45cmの順路を雪掻きして

歩けるようにしようとしたのですが、半日でも僅かな距離しか進めません。諦めかけた時、どこからともなくスコップを持って大勢の人たちが現われました。2年前に解散した施工会社の方々や職人さんたちでした。しかも雪面を汚さないように車を入れず、人力だけで除雪してくれました。この建物は施工会社の方々も一緒に、障害のある子どもたちとのワークショップに参加してくれたので、愛着を持っていて下さいました。審査結果は、安田幸一氏のポーラ美術館、陶器二三男氏の国立国会図書館関西館、私たちの福島県立郡山養護学校の受賞が決まりました。このようにして建築家の実力以上に、コンペの審査員、研究機関、発注者、施工者、編集者、建築賞の審査委員の総意によって、運命が決められていきます。

大学を卒業し、社会人になったばかりの頃は、起伏の少ない野山を歩く、ワンダーフォーゲル的に建築士として生きるつもりでした。運命の悪戯によって建築家になり、時々冬山の氷壁に張り付いているように思うことがあります。建築の設計過程で大きな決断をする時、足元を見ると恐れが感じられます。しかし、現代では氷壁は一人で登るのではなく、キャンプを張り、チームでサポートします。自分の力を過信せず、周囲の力を信じるのです。

本学部の正門からキャンパスに入ると、両サイドに美しい庭園があります。授業の合間にベンチに座り、目を閉じると、遠足の白い体育着でお弁当を広げている少年時代の私が見えます。大切な人との出会いも、未来の姿も、あらかじめ予測することはできません。けれども誰にでも人生を分ける出来事やチャンスが訪れると信じています。そして、本学科のひとり一人が色鉛筆のように、異なる個性の「希望の建築」を見つめることを心から願っております。

浦部智義准教授 (社)日本建築学会東北支部第34回東北建築賞作品賞受賞

この賞は、東北地方においてその建築文化や環境形成の向上に貢献し、地球環境時代に相応しい優れた建築作品、東北地方で発表された将来性が期待される研究活動、その他建築分野にかかわる重要な業績が顕彰されるものである。

「地形舞台」-中山間過疎地域に寄り添う集落づくり拠点-東北建築賞作品賞を受賞して

浦部 智義

今回、このような伝統と栄誉ある賞を賜ったことは、身に余る光栄です。また、ここ数年は研究室活動としても震災関連の話題が多かった中で、震災前から将来に亘る大きな課題とされていた、過疎地における暮らしやそこでの建築のあり方で評価されたことは、個人的には大きな意義があると感じており、研究室メンバーはじめ仲間の方たちとも、そういった意味で喜びを共有しております。また、それは震災復興と全く関連がない訳でもなく、被災地の一部では急速に高齢・過疎化が進むことも予想され、ある意味ではその先行モデルと言えるかも知れません。今回、私たちが取り組んだ古民家とその周辺の改修は、ただ元に戻すのではなく、伝統的な良さを大切にしながら現代的な要素を取り込み、日常的な集落の拠点として生まれ変わらせたもので、復興過程でもそういった手法は避けて通れない問題かも知れません。

具体的に、『地形舞台』は、福島県の中山間地天栄村湯本地区にある築百数十年を超えて空き家となっていた茅葺の古民家を改修・用途変更して、日常的にも気軽に集落の人が集まる場所・舞台に再生したものです。背景や客席となる斜面と庭による「舞台」、間仕切りを取り払いシンプルで広い平面とした約10畳の「土間」、住人の記憶を留める居心地のよい2間の「座敷」からなる施設です。梁や柱など構造も工夫をして、人が寄り付き集まりやすい空間をつくりました。また、この地区は茅葺屋根の家が多く残っていたので、景観を形成する上でも茅葺は重要な要素でしたが、茅葺を全てあらわしにして維持していくことは集落の人にとって負担となります。そこで、軒先の部分だけのある程度あらわしにして、人の目線では茅葺が見え意識できる様な工夫をしました。裏庭は隣接する宿屋さんの土地とつながっており、公共の施設と個人の私有地が一体化されて『地形舞台』を形成しています。土地・建物の所有が行政と民間にまたがっており、官民が互いに協力し合って地域にとって良いものをつくるという、既成の枠組みを超えた取り組みとしても大きな効果であったと思っています。このプロジェクトでは、文化・風土がにじみ出るよう東北らしさも大事にしながら、その様に新たな工法、プログラムを取り入れていることが特徴と言えるかも知れません。

ここ数年、研究室では『東北地方に現存する野外舞台建築・芝居小屋の活用実態と地域における役割に関する研究』と題してそのハード・ソフト両面の研究に取り組んだり、私が日本建築学会文化施設小委員会の主査として『地方におけるこれからの公共文化施設』というテーマに取り組んでいます。もともと私が専門としてきた劇場・ホールなど文化施設に深く関係する内容の提案を、研究室の学生さんと一緒にできたことは、工学部に赴任して来た甲斐を感じました。

暮らしという意味では、今後、この施設がどの様に運営され、どう使われていくかポイントです。計画段階からある程度運営の想定をしておりましたが、折しも作品賞の審査で頂いたご講評「山間の過疎地において古民家を後世に伝え、場所の記憶を継承しながらも、新たな活用の可能性を示す好例」をより長く持続できれば良いと思っています。地域活性化の拠点として、

日常的な寄り合いの場はもとより、落語や神楽などの伝統芸能や文化財の催し物、また朝市が行われるなど、新規に観光客・外部の方々といった交流人口を取り込んだ新たな形のコミュニティ施設となり、山間地の魅力を発信する拠点として上手く機能すれば良いな、と思っております。

このプロジェクトは震災を挟んで約4年の月日を費やしていますが、どの様に改修するかの計画も含め、集落の方々とのワークショップも地道に重ねました。ワークショップに参加される集落の方々がご高齢であったこともあり、時間をかけて丁寧に説明する必要がありました。当然、建築図面だけでは理解していただけず、大小様々な模型を作って何度も説明に出向きました。

さらに、この古民家は百数十年以上集落の中心にあり、集落の方々にとっては思い入れのある建物です。我々、第三者的立場の者の提案を聞きいれてもらうためには、集落の暮らしを理解する姿勢を示さないと始まりません。そこで私たちは、集落の祭りや日常風景などを織り込んだムービーを制作したりして、集落の方々とコミュニケーションを取らして頂く中で風土や暮らしを勉強させて頂きました。

その上で、こういったコミュニティ施設をつくる意義と目的をお伝えしたりしました。お陰で相互理解が深められただけでなく、私も含め研究室メンバーも足繁く通ううちに、高齢・過疎の実態や中山間過疎地域に求められているものや、そこにどのような居場所を作るべきかを考える契機になりました。見方を変え、学生さんが集落にとっては若い交流人口になっていたという面もあります。時に、工事中に学生さんが三味線やギターなど楽器を演奏したりして、集落の方が集まって来てくれたこともありました。そういう意味では、特に建築でなくても質が高くなくても良いと思うのですが、こういった場所では「何かが動いている」ということがちょっとした活力になる大事なことになるかも知れません。今回もそうですが、場合によってはソフト面まで踏み込まないと解決できない問題も多く、それらも合わせて取り組むことで建築の価値も高まるかも知れません。

最後に、かつてこの創建通巻119号の巻頭言で『音楽の都ウィーンでの体験』と題して、私の研究活動を通してのウィーンの街と文化施設での体験を寄稿させて頂いた際に、自分の居る場所を好み・人をもてなす心豊かな一般の人々が文化を育て・支える内容をご紹介した記憶があります。今回は、それと時代も場所も規模も知名度も全く異なっていますが、それらは共通項を持っており、今回の施設が永続的に運営される鍵は、同じである様な気がしてなりません。そのあたりを、自分なりにもう少し研究して見たいと思う今日この頃です。



阿部直人非常勤講師

第34回東北建築賞作品賞受賞と
第7回JIA東北住宅大賞2013・奨励賞を受賞

JIA東北住宅大賞は、東北6県に造られた住宅の中で、デザイン・性能・工法等において、東北の景観と環境に根ざした優れた住宅を設計した建築家(設計者)と施主・施工者に対して贈られる賞である。＊東北建築賞作品賞については前掲

公共建築と住宅の設計に求められるもの

阿部 直人

『えぽか』(本宮市民元気いきいき応援プラザ)

今年6月、日大70号館の9階多目的ホールで第34回日本建築学会東北建築賞の受賞パーティーが行われました。私は本宮市に建つ『えぽか』で特別賞をいただきましたが、今回、日大で表彰を受けたことがとりわけ嬉しかったです。この建築は2007年に本宮市が健康増進＋多世代交流＋子育て支援の複合施設に市民のコミュニティ拠点づくりを求めてプロポーザルを行いました。私たちの案は『誰もが自由に利用できる施設をめざして』というコンセプトで3つの機能を広場のような自由な場所に置き換え、一つの大きな器の中に仕切らずに連続させて配置しました。バリアフリーを実現させるにはガラスの間仕切りやドアさえも取り除く必要があると考えました。1階は点在する部屋(壁で囲われた便所や倉庫)のまわりの広場群からできており、広場と広場とが緩やかにつながって一続きの連続した空間となっています。仕切りがないということは人が利用するのに障害がないということで、利用者は誰もが隅々まで自由に使うことができるし、それぞれの場所の仕上げや色を変えることで多様な表情を持った空間が展開していきます。さらに子供が遊ぶ屋外広場と内部の交流広場を連続させるなど、コンセプトは内外の関係にまで及んでいます。

完成後に訪れると子供たちの賑やかな声が聞こえ、お母さん方は話に夢中、お年寄りが子供を眺めながらマッサージチェアに身をゆだねている。夕方になれば学校帰りの生徒が立ち寄るというように、みんなが自分の居場所を見つけ思い思いに過ごしています。

『喜久田の家』

今年5月には、郡山市内の『喜久田の家』で第7回JIA東北住宅大賞2013・奨励賞をいただきました。両親と子供2人の住まいで、正方形に近い土地の北側に寄せて主要な部屋が南面するように詰めた結果、三角形をしたプランとなりました。この向きがリビングの視線を周辺に建つ大きな住宅から外すことにもつながり、結果的に一日中良好な日当たりと開放的な視界を得ることができました。敷地の高低差とスキップフロアーの高さを調整しながらスタディーを重ね、この不整形な平面にシンプルな切妻の屋根を架けたところ、屋根と同じ形の天井がそれぞれの部屋に不思議な角度を持って現れてきました。さらに壁の仕上を2色のペイントでムラを出し、動物の毛のような柔らかな表情に仕上げたので、猫バスに乗ったような包まれた感じが出ています。(ちなみにクライアントは獣医です)どこにいても全体の中に包み込まれる一体感を感じられるようにしました。

審査をしていただいた古谷誠章氏や五十嵐太郎氏に、基本設計が終わろうとしている時に3.11の大震災を経験し、自分がそれまでつくっていた矩形の形態から様相が変わっていったという話をしました。ねぐらに潜り込むように自分の寝室に行く感覚、体にまとわりつき、柔らかに包まれるような生活の場をつくりたいという気持ちが強くなったのを感じています。

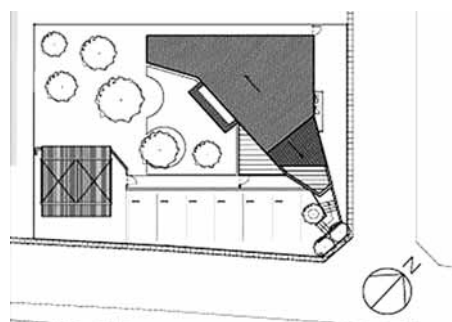
建築は住宅に始まり住宅に終わるといわれています。学生の設計課題も住宅から始まりますが、著名な建築家にとっても住宅の設計は決して簡単ではありません。街並みや家族という社会的な側面を持つ建築の根源的なテーマであると同時に、非常に個人的な要求によって生まれてくる建築であることもまた否めません。そこがどうしても難しく、そして奥深いところである所以です。

公共建築と住宅、一見まったく別種の設計対象のように思われるかも知れませんがそうではありません。公共建築の設計は求められる機能を満たすだけでなく、あるべき社会の提案や人と人の関係性をどう築くのかといった考えを計画に反映させていきます。そこに人という重要な要素が入ることから、感覚やスケールといった住宅設計のデリケートな部分が必要とされるのです。どちらもそこに居るのは人なのです。これを忘れると傲慢な建築になると私は思っています。先日、私が福島地域会長を拝命しているJIA東北支部大会『あとから来る者のために』で、講演していただいた建築家の内藤 廣氏が人として生きることと、建築家として生きることがずれていないか、3.11以降自分に問いかけているという話が心に強く響いています。

私の事務所では幸運なことにこの2つの種類の設計作業がいつも同時進行で進んでいます。



えぽか



喜久田の家

大学院特別講義聴講報告

「東日本大震災からの復興まちづくり」(脇坂隆一先生)を聴講して

大学院博士前期課程1年 薄井良佳

平成26年6月30日(月)、震災復興の第一線で事業に携わっておられる脇坂隆一先生(国土交通省東北地方整備局建政部 都市調整官)をお迎えし、大学院特別講義が70号館7053教室で行われ、院生・学部生・教員約60名が集まった。東北地方整備局の取り組みや復興まちづくりの現状と課題などについての講話の後、院生を中心としたフリーディスカッションが行われた。

最近、あまり見られなくなってきたが、震災から1, 2年経過した頃、マスコミ等から今回の震災は復興が遅いとの批判されたのを覚えているだろうか。そして、なぜ震災からの復興に時間がかかっているのか、その原因を考えてみたことはあるだろうか。脇坂先生は、今回の地震は津波による震災被害であることが原因の一つであると述べている。日本における近代以降の震災を振り返ると、関東大震災では火災、阪神淡路大震災では建物倒壊による被害が大きく、まちの復興としても、燃えにくいまちをつくる、揺れても倒れない建物をつくる、といった対応が行われた。しかし、今回の震災復興を、今までと同じように「津波で流されない建物をつくる」という考えで進めていくのはどうだろうか。津波の衝撃力を考慮すると、それは非現実的であるということがわかるだろう。では、「どのようにすれば良いのか」というのが今回の震災復興の大きなポイントとなるのだろう。

国土交通省は、震災後に現地調査を行い、被災した全市町村にコンサルタントをつけ、被害状況をまとめると共に復興まちづくりの計画をつくった。その結果、堤防の高さを決定するにあたり、津波の高さを数十年から百数十年の頻度で発生しているものを対象にし、また、地盤沈下を考慮した高さとして、これを災害復旧事業として全域で行うこととなった。しかし、その土地に住んでいる住民としては、堤防の高さもさることながら、現地で再建できるのかが重要な問題であると説明されている。しかし、津波を経験した直後では、現地で再建するよりも「もうあんなところに住みたくない」という考えに至るのが普通ではないだろうか。これらを踏まえたうえで「どのようにすれば今回のような津波が来ても安全なまちをつくれるか」を考えていくことが重要となるのだろう。

復興まちづくり計画の策定にあたり、堤防をつくった場合の津波浸水シミュレーションが行われている。その結果

を基に、ある規模の津波高さで浸水してしまうエリアに対して、盛土による地盤の嵩上げや、浸水エリアの区画を高台に移転、二線堤の構築や避難施設の整備、等をそれぞれの市町村の復興まちづくり計画に盛り込んでいる。すなわち、現地でそのまま再建するには、津波による壊滅的な被害により困難であり、堤防をつくるだけでなく、地盤の嵩上げや、別の高台に移るといった抜本的改造が必要である。しかし、高台に移転するにしてもそう簡単にできるものではなく、被災者の再建意向を把握するとともに、移転先の高台の土地所有者に、用地買収の許可を得なければならない等の問題が多数ある。過去の震災復興と比較して、被害状況の把握から工事着工までの流れを考えると、今回の震災復興が遅いとはたしていえるのだろうか。

講義の最後に、復興の現状について、復興が比較的早い市町村を複数取り上げて説明されている。被害が小さいことや、津波による行方不明者が少なかった等の要因もあるものの、それぞれ共通しているのは、住民を主体とした復興まちづくりを行っている、住民に対しオープンな復興対策を行っているという点である。まちづくりの基本は住民参加である。その地域に住んでいる住民、生産活動を行っている人がどのようにしたいか、両者の意見、希望を反映することが震災復興まちづくりにおいてもより重要なポイントであると感じた。

院生を中心としたディスカッションでは、主に、「まちづくりについて考慮すべき点」、「移転の際に起こる課題」、「震災発生当時の意識」、「震災以前に携わった事業と今回の震災復興との関わり」の4つのテーマについて行われた。活発な議論により、復興のあり方についての多様な視点を再認識することができた。

最後に、この講義を聴講し、震災復興として、新たにまちをつくりあげていくことの難しさ、複雑さについて深く考えさせられた。自然の脅威から人々の暮らしを守る、新たに暮らしを作り上げるにはどのようにすれば良いのかなど、建物や土地に携わるであろう我々に大きなヒントを提示した、大変収穫の多い貴重な講義であった。

左：脇坂先生による講義の様子



右：院生を中心としたディスカッション



大学院特別講義聴講報告

「構造の世界で楽しんでいます」(岡田章先生)を聴講して

大学院博士前期課程1年 清水健次

平成26年10月29日(水)、岡田章先生(日本大学理工学部建築学科教授)をお迎えし、大学院特別講義が70号館7074教室で行われた。

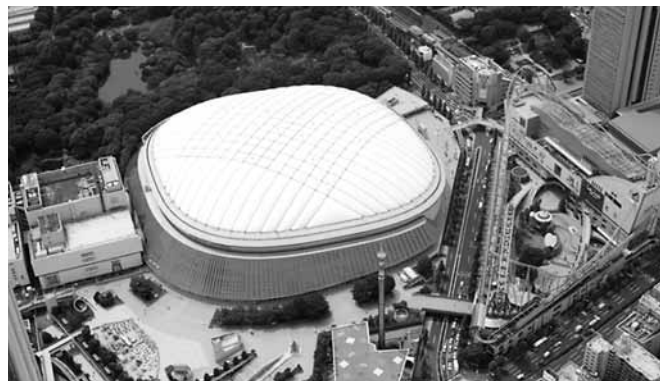
講義の冒頭、山本学治氏の本の紹介の中で「個性的創造と普遍的創造」という言葉について述べられていた。個性的創造とは意匠・デザインのことであり、普遍的創造とは構造・エンジニアリングのことである。これが岡田先生の原点であり、常に考えていることであるとのことであった。私自身、構造の勉強をしている最中ではあるが、この言葉を聞いて「あ、なるほど」と共感することができた。

一般の人が建築を評価しようとするとき、パッと見てわかるデザインや規模に目がいきつてしまい、構造と言っても何のことか、その意義すらも全然理解してもらえない。しかし、建築の勉強をしてみてもわかったのは、どんなにすごいデザインでも、それを実現させる構造がなくては一つの建物として成り立たないということだ。デザインではなく、その構造も同様に称えられていいものだと考える。構造の世界にいる方々の話を聞くと、構造屋は計画の最後の方に参入し、そのためにしわ寄せが多くなること多いこともわかってきたが、必要不可欠であるのに、その扱いがまだまだ建築家と同列ではないことに疑問を感じてしまう。

岡田先生は自分のコンプレックスから軽量で美しい構造に憧れ、膜構造やハイブリッド・テンション構造を始めたと述べていた。膜構造では日本で最初の大規模空気膜である東京ドームに携わり、その後は糸を組み合わせた構造、片持梁の張り出しの長い静岡スタジアムや六本木ヒルズのアリーナなどを手掛けられている。同じ構造

に見えても実際にはその場に合った形態に変化させて取り入れられており、構造の設計をしているのに、どれも美しいということに感心させられた。意匠と構造はセットだという固定概念があったが、構造がなくては成り立たないデザイン性の高い建物を構造の観点のみで成立させていることに大いに驚かされた。

私は個性的創造と言われるデザインは不得意であり、建築の中でもそれと関わりのないと思っていた構造の分野を選んだ。構造ならば美しさや驚きなどはなくとも、着実に積み重ねることで建築物を成立させられると考えていたからである。しかし、どのような構造でも、それを究めてより良いものにしようと積み重ねていくと、建築家と呼ばれる人たちのデザインに負けることのない素晴らしい建築物を創造することが出来るということをし、この講義を通して学ぶことが出来た。構造の世界に来たからといってカッコいいデザインをあきらめる必要は全くなく、構造を学べば学ぶほど美しい建築物に近づくことを知ることができ、とても有意義な講義であったとともに今後の励みとなる講演でもあった。



岡田先生が手がけられた作品事例・東京ドーム



岡田先生による講義の様子



岡田先生が手がけられた作品事例・六本木ヒルズ

海外研修報告

Melting Pot - Japanese woman in New York-

専任講師 市 岡 綾 子

このたび、平成25年度日本大学長期海外研修研究員として、3月下旬から約11ヶ月間、日本を離れ欧米諸国のまちづくりを調査しています。今回は7月初旬から3ヶ月間滞在したNYについて報告します。

約20年前に一度訪れましたが、911以降のNYをこの目で確かめたいという動機で訪問しました。夏のNYはうだる暑さと聞いており、覚悟の上で乗り込みましたが、今年のNYは異常気象で25℃前後の気温の日が続き冷夏だったため、まともに蝉の声を聞かずに夏が終わりました。錦織圭選手がUSオープン初の決勝進出に沸いていた頃だけは、30度以上の残暑でした。7月4日の独立記念日は花火での祝福が有名ですが、今年はイーストリバーでの打ち上げでしたので、対岸のブルックリンから見ると、ロアーマンハッタンの摩天楼をバックに壮大な花火の競演を楽しむことができました。NY在住の日本人の方々は日本の花火の方が美しいと話されますが、個人的には日本よりも花火の高さが低く、かつ高台から眺めたこともあり、ダイナミックで美しく、さすがNYと感激しました。花火のビューポイントは、川沿いの公園や開放される自動車専用道などに予め設定し徹底周知、当日の夕方から入口を限定し、ゲートを設けて警察によるテロ対策の荷物チェックを実施。不特定多数が集まる大きなイベントは、常にテロの標的となりうることを意識しています。

今年のNYでの話題といえば、グラウンド・ゼロの地にメモリアルミュージアムが開館したことでしょう。今年の911の式典は完成した広場で初めて開催。元あったツインタワーの位置にはメモリアルファウンテンが建設され、その淵には犠牲者全員の名前が彫られています。ワンワールドトレードセンターは空に溶けてしまいそうな印象です。突然、夜のニュース映像がNYの朝に切り替わり、信じ難い事実をリアルタイムで見ていたあの日から13年が経過。しかし、当時を知るNY在住者の多くは、ニョキニョキと再び空に向かって建物が伸びていく様は見えていたが、未だグラウンド・ゼロ方面には出掛ける気にならないそうです。13年という月日の長さでも未だ解決できないテロによる心の痛み、時が解決



Statue of Liberty (at Brooklyn)
今回は上陸せず。このシルエットは私のお気に入り。



Independence Day Fireworks (at Brooklyn)



911 Illumination (at Brooklyn)



One World Trade Center



Memorial Fountain

すると簡単には言えません。さすがに記念撮影をする気にはなれませんでした。笑顔で記念撮影する観光客が大勢いるのも事実。遺族からは、観光地化することへの反論も多くあると聞きます。夜には青いレーザービームで表現されたツインタワーの面影がとても美しく、全てを忘れてしまいそうでした。

NYの超高層建築では、ディテールにまで凝ったデザインが秀逸のクライスラービルが一番のお気に入りになりました。マンハッタンだけでなく、対岸のブルックリンやクイーンズからも、まさに七変化な姿を楽しめます。一晩中ライトアップされた姿も美しい。また、フラットアイアンビルの特徴的な形状を活かした建築の堂々たる姿も、周辺環境の変化に動じず、約100年間変わらないことに感激しました。

NYの美術館は週に1日、夕方から入館料が無料または寄付になるため、その前は長蛇の列ができ、グッゲンハイム美術館では敷地を約一周します。ロアーマンハッタンにあるSANAAが設計したNew Museumは、ユニークな建築フォルムが周辺と調和しています。最上階のsky roomでは、オープンエアのデッキからNYを眺められます（週末のみオープン）。この夏の企画展“Here and Elsewhere”では、アラブ圏の芸術を見る機会となりました。彼らの真の姿を理解できていなかった、とアートゆえにダイレクトな衝撃を受けました。人種のるつば“Melting pot” NYでは、グローバルの意味を常に考えさせられます。そして自分もその一員であるのだと。

滞在中に有名なLOVE彫刻のすぐ近くに、同一芸術家の作品HOPE彫刻が設置されました。NYでは常に紛争やテロのニュースが流れ、GlobalなHOPEを意識します。インターネットの普及やハイビジョン映像の発達の恩恵により、日本に居ながら世界を知り得る今、世界を知った気になってはいませんか。百聞は一見にしかず。日本で見ていても日本の価値観での判断でしかありません。自分の目で見てその場の空気を吸い、そこを歩き交う人々の人並みに紛れて、様々な経験をする。それは日本の今の姿を知るために……。学生時代、メロディが好きだったStingの“Englishman in New York”では、legal alien（異邦人）として、英国紳士がNYで生きている様子を歌っています。時々このメロディを口ずさみながら、颯爽と（？）歩いていたNY生活3ヶ月でした。



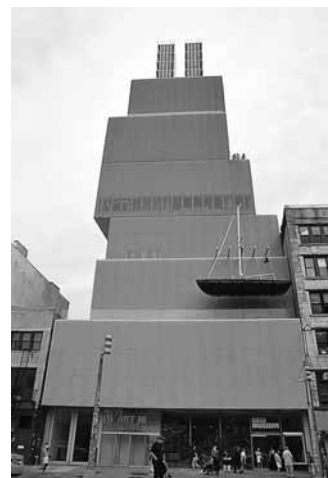
Chrysler Building



Flatiron Building



Guggenheim Museum



New Museum



New Museum (Sky Room)



Robert Indiana Works (LOVE: 6av 55st, HOPE: 7av 53st)

第18回JIA東北建築学生賞受賞者の声

優秀賞受賞 4年 築山 茉由子

今回応募させて頂いた作品は4年生前期の課題で取り組んだものをブラッシュアップしたものです。課題は“街を変える建築”で、それに応える計画・設計として、私は特に地方都市で深刻化している中心市街地の活性化問題に取り組みました。オーソドックスなテーマかも知れませんが、私自身も地方で育ち今や日本全体に共通する事項が含まれており、それに対して建築で出来ることを自分なりに整理して見たいという思いがあったからです。敷地は、現在大学生活を過ごしており繰り返しサーベイに出かけられる郡山市の駅前土地を選定しました。計画・設計に当たっては“福島を元気に”という隠れたテーマを常に意識しながら、人々の日常を豊かにすることが、復興の近道・手掛かりになるのではないかなというメッセージを作品に込めたいと考えていました。また、中心市街地活性化の問題の一般的な解決策はボトムアップにこだわり過ぎた計画・設計になりがちであることから、その姿勢は大事にしながらも、建築の持つ力強さを活かし小さくても丁寧に空間設計することを大切にしました。

具体的に、私が選定した敷地には、かつてファッションビルであった中高層の廃墟ビルが、現在まで10年以上そのままの状態而建っています。この中高層のビルに着目し、中心市街地にありがちな縦に積層する建築を建てることで地上と内部空間が分断されている現状を各地における普遍的な問題だと捉えて、あえて低層の帯状空間

JIA東北建築学生賞に応募した私の作品は、3年前期の課題で提出したものをもとに、夏休み期間中により良いものになるように仕上げていきました。今まで、私はコンペ等に応募する様な経験が無かったため、右も左もわからない状態からスタートしましたが、指導して頂いた先生方や院生の方々はじめ、まわりにサポートをして頂きながら、作品を仕上げ提出できたことが先ず自信につながりました。

私の作品は、楽都をコンセプトに掲げながら生の音楽に触れることの少ないと感じる郡山の状況を鑑み、まちなかの象徴的な建物である公会堂に隣接した敷地に音楽の発信の場を設け、その文化の発信によって楽都を具現化しながら人と建築を繋げるというものでした。この案をブラッシュアップする際に苦労した点は、建物の造形の明確な理由付けでした。課題提出時には、その理由があまり明確ではなかったため、多くの人に理解してもらえない様な造形とその理由付けを、身近な方々に相談しながら変更していきました。

また、今回の私の作品は、壁や屋根が傾いたりしている複雑な形状の建物で、ヤスリで微調整しながらの模型の制作となり、かなりの時間を費やしました。締切が迫っていたこともあり、周辺模型などは友人にも手伝ってもらいました。その際に、手伝ってくれる人に効率良

く横に連ねて街に対してのびやかに開いていく形態・空間デザインを意識しました。また、内部空間は学習スペースや食空間など、再訪性が高く帰属心を生む様なプログラムを盛り込むことで人々の日々の日常を豊かにする“いえ”の様な空間を目指し、さらに、それらを複雑に複合して配置することで、音や匂いや気配の混ざり合う“リビング”の様な空間になることを意識しました。

今回このコンクールに参加させて頂いて、自分の作品に込めた想いを他の人に伝えることの難しさと、それを共有出来た時の面白さを実感できました。そのことで、今後より表現力を研ぎ他者に伝える技術を身に付けていきたい、という意識にさせられました。学生時代として建築の計画や設計に取り組める機会も数少ないですが、社会に出て仕事に取り組む前に、それらを通して自分らしさを模索しておきたいと思っています。

最後になりましたが、ご指導いただいた先生方や先輩方、また手伝い・応援してくれた友人達に心から感謝申し上げます。



受賞作品と筆者

奨励賞受賞 3年 高梨 眞裕

く相手に伝わる様に指示を出したりする様な、協働作業の難しさも再認識させられました。兎に角、様々な人達に助けを借りて提出用のプレゼンテーションボードを完成させることができました。

審査会は三段階に分かれていて、一次は審査員に自分の作品を説明し、二次ではその審査員が説明された作品を他の審査員に説明し、投票が行われました。三次審査では、投票によって選ばれた10作品のプレゼンと質疑応答の後、投票によって賞がきまるといったもので、幸い私は最後まで体験することになり奨励賞を頂きました。

三次審査の質疑で、十分に納得できる応答が出来なかったことは悔やまれますが、それは今後に活かしたいと思います。このコンクールでの貴重な経験を活かして、これからも努力して行こうと思います。

最後になりましたが、指導して頂いた先生方や院生の方々をはじめ自分を支えて頂いた方々に、この場を借りて改めて心から感謝申し上げます。



受賞作品と筆者

JIA全国卒業設計コンクールに参加して

大学院博士前期課程1年 小林 拓也

全国卒業設計コンクールへの参加は私の今までの学生生活の中でも、とても重要な経験のひとつとなりました。地方という場所の問題もあって、普段、あまり深く関わる事のない他大学のデザインに対する意識の高い建築学生がどのような考えを持っているのか、プレゼンテーションを含めてどのような案が評価されているのか等、学内発表会では味わえない新鮮さがありました。これから踏み入れる私の目指している建築の世界の入口を少し体感できたような感じもしました。そして何よりも、全国の意識の高い学生と自分との距離感の確認と少しの自信が得られたことは大きな収穫だったと思います。JIA東北では代表作品に選出され一応の評価は得られていたのですが、多くの審査員から評価されている案（作品と人）にあって、私が十分でなかったものは何なのか、相手に伝えることの大切さや難しさも含めて、今回の経験から考えさせられる事は多くありました。

「その差は何なのか」自分なりに振り返って見ると、多くの審査員に評価されている案は、表現力の良いのは当然で、どれも既成の建築の枠組みを揺さぶる様な提案であったと思います。つまり「建築の可能性」をどこまで追求できているかという感じにも思えました。それは傍から見ればあまり差がないようで評価する側からは見える差、言いかえるなら100m走で0.1秒の差を競っているアスリートだけが実感できる差に似ているのかな、とも思いました。

私が得られた少しの自信とは、私の案にも審査員の票が入ったことや、現在、研究室として一緒にプロジェクトをやっているNASCA・八木佐千子さん（審査員）から今後につながる貴重なコメントも頂きました。それらを通して、他大学の意識の高い学生と同じ土俵には立てていることを実感できたことは、自信につながりました。

それらの経験を通して得られたことは、「目から鱗」という感じではなく、まだ多くの問いを抱え込んだままです。その経験から数ヶ月間経ちましたが、自分の中のモヤモヤが無くなるどころか今も新しいモヤが生まれて来ます。しかし、そのモヤモヤの源泉となった卒業設計への取り組み、そのモヤに気づかせてくれたコンクールへの参加、そのモヤをひとつひとつ取り除いていった先に、何かいい景色があるような気がする、そんなことを研究の傍らで考えさせてくれてモヤと格闘する今の大学院生活は、とても貴重な時間・経験だと感じています。

また、それらは一連の流れの様であるが、どれも先生や先・同・後輩との充実した時間がないと成しえなかったことである事ですので、周囲の方々には感謝したいと思います。



作品と筆者

『第27回上野の森美術館・日本の自然を描く展』で上野の森美術館賞を受賞して

非常勤講師 二瓶 博厚

4年前から大学院M1「建築意匠特論」を担当しています非常勤の二瓶博厚です。

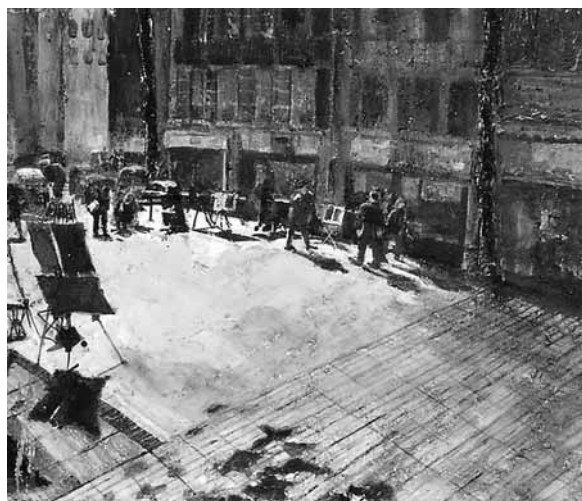
3年前東北工大を定年退職し東京に戻りましたが、これを機会に念願だった「絵」を始めました。日本画でこの夏、上野の森美術館主催の第27回「日本の自然を描く展」に応募し、〈似顔絵通りの朝〉が上野の森美術館賞を受賞しました。全国のプロ、アマから約4600点の応募、2700点が入選。うち冠賞は19点でした。昨年は上位入選ということでしたが、今年はまったく予期せぬ大賞を受賞することが出来ました。応募は大きさ10号以内、課題部門と自由部門の2部門があり、私の絵は自由部門の応募です。今回の絵は私の数少ない海外旅行からのもので、ガウデイの建築があるバルセロナの街の風景です。団体行動前の早朝、街に出てスケッチしたもので、受賞の作品は似顔絵屋さんもまだ出勤していない朝の通りの空気を、これから展開されるであろう賑わいを想像しながら描いたものです。

私の大学の建築学科では週一回絵画の授業があり、当時安井曾太郎の弟子である洋画家、小野末先生に指導を受けました。先生にはだいぶ可愛がられ影響を受けました。その頃3年間ぐらいデッサン、クロッキーの勉強を夢中でやったものです。

平成に入って西武のCCコミュニティカレッジの日本画教室に通い日本画の基礎を勉強、最近少し日本画が分かってきました。しかし今回の絵にかぎらず私の絵は誰からも油絵画じゃないのかと言われていました。

建築の一線を退いた現在、ようやくたどり着いた「絵の道」ですが、年齢は関係ないと思い制作を続け、100号以上の大きな絵にも取り組んでいるところです。

今後ともよろしくお願いいたします



上野の森美術館賞を受賞した「似顔絵通りの朝」

建築作品見学会に参加して

建築学科3年 長 龍之介

平成26年6月7日(土)、3年次の「建築設計演習Ⅲ」の授業の一環として、希望者を募った建築作品見学会に参加してきました。この見学会では、設計課題の内の1つである芸術家記念館(美術館)の参考になる栃木県にある、『那珂川馬頭広重美術館(隈研吾)』、『那須歴史探訪館(隈研吾)』、『STONE PLAZA(隈研吾)』、『藤城清治美術館』の4施設が対象となりました。建物内で一般に公開されている部分のほか、『那須歴史探訪館』では普段立ち入って見ることの出来ない裏側の非公開部分も見学させていただきました。

4施設のうち3施設が隈研吾さん初期の頃の作品で、地元の烏山和紙や芦野石や八溝杉を用いて、その環境に溶け込むように演出作られていました。現地に行ったことで、エントランスまでの道筋や展示室から出たときのヴィスタなど、魅力的な建築にする様々な工夫を現地に行って体感することが出来、大変充実した見学会でした。ここで得た経験を生かし、今後よりよい設計が出来るよう精進していこうと考えています。



那珂川馬頭広重美術館



STONE PLAZA

建築施工現場見学会

教授 浅里和茂

今年度の現場見学会は福島市の介護付き有料老人ホーム新築工事現場にて9月27日に開催され、学生22名が参加しました。今回の現場は敷地が不整形なことから平面形が三角形になっており、規模が小さいながらも竣工までには工夫の必要な現場と言えます。当日は設計担当者として本学部OBの竹ヶ原雄氏(佐藤総合計画, 1999年佐藤研大学院修了)が仙台から駆け付けて下さり、設計者の立場からも説明を頂きました。現場は鉄骨建方が行われており、円形と角形の鋼管、接合部の仮止め、トルシア型高力ボルトの締め付けなどの実物を見る事が出来ました。また、モルタルに覆われる前の柱脚アンカーボルトでは、その特徴や締め付け方法なども詳しく説明して頂きました。参加者は講義では分からない部分も実物を見ることによって具体的に理解することが出来たようです。設計者からの「図面を見ながら自分がそこを歩いている状況をイメージして」というアドバイスは、強く印象に残りました。最後には就職活動や仕事の内容などについても丁寧に答えていただき、3年生の今後にとっても役立つ見学会となりました。



学 会 発 表

* 届け出があった記事を掲載

■2014年日本建築学会大会

日時：平成26年9月14日～9月14日 会場：神戸大学（兵庫県）

- ・ポリマー混入ハイブリッド型繊維補強ポーラスコンクリートの耐凍結融解性 ○齋藤俊克, 十文字拓也, 出村克宣
- ・新規な防せい性混和材を混入したポリマーセメントモルタル中に埋設した棒鋼の発せい挙動 ○渡辺宗幸, 齋藤俊克, 出村克宣
- ・石灰岩砕砂を用いたポリマーセメントモルタルの曲げ及び圧縮強さと耐硫酸塩性 ○八木将太郎, 齋藤俊克, 出村克宣
- ・自己修復システムを用いたRC構造物の長寿命化に関する検討 鉄筋腐食に対する抵抗性 ○尾形雅人, Sanjay PAREEK
- ・様々な遮蔽条件に対する高密度モルタルの γ 線遮蔽性能評価に関する実験的研究
ーその1 放射能汚染レベル及び遮蔽容器形状が異なる場合の γ 線遮蔽性能比較ー ○Sanjay PAREEK, 木村健一, 鈴木裕介, 荒木慶一, 藤倉裕介
- ・様々な遮蔽条件に対する高密度モルタルの γ 線遮蔽性能評価に関する実験的研究
ーその2 損傷を有する高密度モルタルの γ 線遮蔽性能劣化ー ○木村健一, Sanjay PAREEK, 鈴木裕介, 荒木慶一, 藤倉裕介
- ・インドの住宅におけるパッシブデザインに関する研究 その1 計画的側面を中心とする分析 ○三浦洵, 浦部智義, Sanjay PAREEK
- ・鉄骨置屋根形式RC造建屋の耐震補強における屋根面ブレース設計に関する研究 その1 建物概要および耐震補強概要
○清水健次, 浅里和茂, 成瀬啓一, 瀬下 守, 菅沼咲希, 日隈宏法
- ・鉄骨置屋根形式RC造建屋の耐震補強における屋根面ブレース設計に関する研究 その2 屋根面ブレースの配置による補強効果
○菅沼咲希, 成瀬啓一, 浅里和茂, 瀬下 守, 清水健次, 日隈宏法
- ・直接消去法による動的縮小復元法 ○倉田光春
- ・粘弾性理論による線材要素の振動方程式 ○星賢護, 野内英治, 倉田光春
- ・構造部材の分布機構に関する研究 ○高橋佑弥, 倉田光春
- ・幼稚園児の衝撃力特性 ○多喜翔一, 濱田幸雄
- ・針生ぼしっぱの家ー中山間地域集落拠点づくりー ○樋口卓史, 浦部智義, 芳賀沼整, 滑田崇志, 田中重夫, 早川真介
- ・釜石市大只越に設置された震災復興まちづくりハウス「KAMAISHIの箱」の利用実態の調査分析 ○阿部慎也, 浦部智義, 芳賀沼整, 滑田崇志
- ・住宅における子ども室の位置付けに関する研究ー大学生を対象とした調査分析ー ○近藤拓馬, 本杉省三, 浦部智義
- ・仮設住宅に入居する避難者の今後の住まい選択の研究ー東日本大震災後の福島県内のログハウス仮設住宅団地を対象とした考察ー
○小林拓也, 浦部智義, 芳賀沼整, 滑田崇志, 早川真介, 佐久間皓惟
- ・木造小規模コミュニティ型復興住宅モデルの温熱特性ーその1 ログハウス工法住宅の室内熱容量が温熱環境に与える影響ー
○長内勇樹, 宮岡大, 浦部智義, 芳賀沼整, 滑田崇志
- ・準寒冷地における夏・冬のパッシブデザインの統合ーその3 実験棟（ロハス3号）における室内熱容量を中心とした検討ー
○宮岡大, 長内勇樹, 浦部智義
- ・公園内における移動イス設置方法に関する研究ーその3 季節差による移動イス利用実態ー ○大矢康隆, 土方吉雄, 三浦金作, 薄井良佳
- ・公園内における移動イス設置方法に関する研究ーその4 移動イス設置場所による利用実態ー ○薄井良佳, 土方吉雄, 三浦金作, 大矢康隆
- ・アーケードのある街路の空間特性に関する研究ーその6 東西3アーケード歩行時の空間定位についてー ○山口高志, 三浦金作, 土方吉雄
- ・東日本大震災に伴う福島県の文化財建造物等の修復状況について ○速水清孝
- ・構造技師・建築家ヤン・ヨセフ・スワガーの日本時代の建築作品に関する考察 ○小室加津彦・速水清孝

■日本造園学会東北支部第13回支部大会

日時：平成26年10月25日～26日 会場：弘前文化センター（青森県）

- ・郡山市重点整備地区における街路空間の緑量と心理的評価 ○山田瞭, 土方吉雄, 三浦金作
- ・児童の下校時における道草遊びの動因について ○中谷哲郎, 土方吉雄, 三浦金作
- ・官民協働による街路空間形成に関する研究ー白河市の金屋町・愛宕町・大工町通り景観まちづくり協議会をケーススタディとしてー
○薄井良佳, 土方吉雄, 三浦金作
- ・福島県須賀川市のまちなかにおける土蔵修復の実態把握 ー修復状況の記録保存と代用材の検討ー ○佐藤いちか, 市岡綾子

■第41回セメント・コンクリート研究討論会

日時：平成26年10月10日 会場：新潟日報メディアシップ（新潟県）

- ・エマルジョン処理竹補強セメントモルタルの基礎的性質 ○齋藤俊克, 出村克宣

■International Conference on Grand Renewable Energy 2014(GRE2014)

日時：平成26年7月28日 会場：東京

- ・Study on Houses of India with a Focus on Thermal Environment -Comparative Analysis of the Different Major Climate Zones-
○Makoto Miura, Tomoyoshi Urabe, Sanjay Pareek, and Sanjukta Bhaduri

■The 3rd International Conference on Engineering and Technology Innovation 2014

日時：平成26年11月 会場：Kenting, Taiwan

- ・Finite Element Analysis of Non-Uniform Beam Made of Axially FGM Subjected to Multiple Loads
○Thanh-Huong Trinh, Buntara Sthenly Gan and Dinh Kien Nguyen

■2nd International Conference on Sustainable Civil Engineering Structures and Construction Materials, 2nd SCESCM

日時：平成26年9月 会場：Yogyakarta, Indonesia

- ・Finite Element Formulations for Functionally Graded Material Beam Structures ○Buntara S. Gan
- ・The influence of single inclusions to the crack initiation, propagation and compressive strength of mortar
○A. L. an, B. S. Gan and Y. Setiawan

■The 9th International Conference on Structural Dynamics, EUROdyn 2014

日時：平成26年7月 会場：Porto, Portugal

- ・Dynamic reduction and recovering based on substructuring method
○Mitsuharu Kurata, Buntara Sthenly Gan, Eiji Nouchi
- ・Dynamic analysis of multi-span functionally graded beams subjected to a variable speed moving load
○Buntara Sthenly Gan, Nguyen Dinh Kien

寄 稿 論 文

- 浦部智義, 三段跳的な連続性, 「地方におけるこれからの公立文化施設」寄稿論文集, 日本建築学会文化施設小委員会, pp. 79-84, 2014年9月7日
- 浦部智義, 芳賀沼整, 滑田崇志, 「仮設住宅に入居する避難者の今後の住まい選択の研究」特集：福島の復興まちづくり, pp. 40-41, 都市計画 VOL. 63, No. 5, 日本都市計画学会

学 術 論 文

* 届け出があった記事を掲載

- ・齋藤俊克, 出村克宣, 十文字拓也, 「ピニロン短繊維及び微細繊維を併用した繊維補強ポラスコンクリートの機械的性質」, 日本建築学会構造系論文集, Vol. 79, No. 702, pp. 1081-1088, Aug. 2014.
- ・大塚秀三, 湯浅昇, 齋藤俊克, 荒巻卓見, 「専門工事業者を対象とした建築解体工事の実状に関するアンケート調査」, 日本建築学会技術報告集, Vol. 20, No. 46, pp. 855-860, Oct. 2014.
- ・安藤祐太郎, Sanjay PAREEK: 各種コンクリート及びポリマーセメントモルタルの燃焼特性及び熱伝導特性に関する評価検討, コンクリート工学年次論文集, Vol. 36 / No. 1, 1306-1311, 2014 / 07
- ・尾形雅人, Sanjay PAREEK: ネットワーク及び補修剤を用いた自己修復システムの防錆性向上に関する検討, コンクリート工学年次論文集, Vol. 36 / No. 1, 1654-1659, 2014 / 07
- ・鈴木裕介, 木村健一, Sanjay PAREEK, 荒木慶一: 鉄粒粉骨材を用いた高密度モルタルの基礎物性と γ 線遮蔽性能評価, コンクリート工学年次論文集, Vol. 36 / No. 1, 1762-1767, 2014 / 07
- ・Sanjay PAREEK 1, 三浦裕騎 1, 荒木慶一 2, Kshitij SHRESTHA: 超弾性合金及び自己修復ネットワークシステムを用いたRC梁部材の付着性及びす曲げ性状, コンクリート工学年次論文集, Vol. 36 / No. 1, 1642-1647, 2014 / 07
- ・Sanjay PAREEK: Radiation Shielding Properties and Freeze-Thaw Durability of High-Density Concrete for Storage of Radioactive Contaminated Soil in Fukushima, 1st International Conference on Ageing of Materials and Structures (AMS' 14), pp. 1-8, 2014 / 06
- ・Sanjay Pareek, Kshitij Shrestha, Yusuke Suzuki, Toshihiro Omori, Ryosuke Kainuma and Yoshikazu Araki: Feasibility of Externally Activated Self-Repairing Concrete with Epoxy Injection Network and Cu-Al-Mn Superelastic Alloy Reinforcing Bars, Smart Materials and Structures Journal, IOP Publishing, Vol. 23, 105027 / 20, 1-13, 2014 / 09
- ・Buntara Sthenly Gan, Nguyen Dinh Kien, AyLie Han and Sofia W. Alisjahbana, Proposal for fast calculation of particle interactions in SPH simulations, Vol. 104, 20-29, Computers & Fluids, ScienceDirect, November 2014.
- ・Loc V. Tran, Chien H. Thai, Hien T. Le, Buntara S. Gan, Jaehong Lee, H. Nguyen-Xuan, Isogeometric analysis of laminated composite plates based on a four-variable refined plate theory, Vol. 47, 68-81, Engineering Analysis with Boundary Elements, ScienceDirect, October 2014.
- ・Buntara Sthenly Gan and Nguyen Dinh Kien, Large Deflection Analysis of Functionally Graded Beams Resting on a Two-Parameter Elastic Foundation, Vol. 13(3), 649-656, JAABE, AIJ, September 2014.

■土方准教授は、7月2日、福島市より、福島市住宅マスタープラン策定委員会委員を委嘱され、委員長に選出された。

■浦部准教授+浦部研究室と平野非常勤講師は、7月4日、「ふくしま子育て環境構築プロジェクト」・「かつしか風の子保育園・学童保育クラブ」で第8回キッズデザイン賞を受賞された。

■齋藤助教は、7月7日、(公社)日本コンクリート工学会よりコンクリート工学年次大会2015(千葉)実行委員会生コンセミナー部会委員を委嘱された。

■土方准教授は、7月22日、福島県より福島県自然環境保全審議会専門委員を委嘱された。

■土方准教授は、8月6日、郡山市より郡山市建築審査会委員を委嘱され、会長に選出された。

■土方准教授は、8月28日、郡山市より郡山市総合治水対策連絡協議会委員を委嘱され、副委員長に選出された。

■浦部准教授+浦部研究室は、計画・設計に関わった唐櫃美術館(香川県・豊島)において、夏期休暇中に福島震災アーカイブの展示・運営を行った。

■浅里教授は、9月、福島県建築安全機構が主催する「高校生が参加する地域防災授業」の一環として「地震のメカニズム」と題する講義を福島工業高校、郡山北工業高校、会津工業高校の県内3工業高校で行われた。

■出村教授は、9月1日付で日本大学副学長(研究(含む研究所)、産官学連携知財センター、総合学術情報担当)に就任された。

■浦部准教授は、9月7日、日本建築学会文化施設小委員会主査として、上田市交流文化センター・市立美術館で行われた研究会「地方におけるこれからの公立文化施設」の企画・運営・進行を行われた。

■土方准教授は、10月15日、福島県より福島県土地収用事業認定審議会委員を委嘱され、会長に選出された。

■Sanjay PAREEK准教授は、10月27日、インド技術者協会から招待講演依頼があり「Application of Self-Healing Technology in Concrete Products in India」と題して講演し、功労賞を受賞された。

教室ニュース

■浦部准教授+浦部研究室は、11月から金沢21世紀美術館で行われている、ジャパン・アーキテクツ「3.11以降の建築」展において、テーマ「縦ログ構法」の設営・展示を行った。

■土方准教授と浦部准教授は、11月7日、富岡町より富岡町災害復興計画(第二次)策定政策化会議の委員を委嘱され、土方准教授は会長に選出された。

■浦部准教授は、11月7日、福島県より福島県大規模木造建築推進検討委員会委員を委嘱された。

■浦部准教授は、11月8日、福島県教育会館で開催されたJIA東北支部建築家大会2014・福島復興に関するシンポジウム「あとから来る者のために」のパネリストとして参加された。

■小林拓也君(浦部研・M1)の研究活動が、11月17日の福島民友のふくしま未来展望のコーナーで「音楽でつながる街に」と題し、復興に役立つ建築研究として掲載された。

■浦部准教授は、11月23日、日本大学工学部で開催されたFOUR WINDS乳幼児精神保健学会(第17回大会)のシンポジウムにおいて、「地域の子どものいのちを守る目の立場から」と題して話題提供しパネルディスカッションに参加された。

■鈴木教授は、11月24日、日本大学工学部で開催されたふくしま健康・省エネ住宅推進協議会主催シンポジウムのパネルディスカッション「福島型健康・省エネ住宅による地域活性化と健康長寿の実現を目指して」のパネリストとして参加された。

■浦部准教授+浦部研究室は、11月28日、古殿町との官民連携調査「『観光・地域資源を活かしたまちづくり提案』に関する研究」の最終報告会を行った。

■Sanjay PAREEK准教授は、建築研究開発コンソーシアムより「高断熱性積層複合材料の火災安全性評価方法に関する国際標準化のための委員会(略称:SWP防火ISO委員会)」委員を委嘱された。

アルパカが工学部へやってきた!

北桜祭初日の10月25日、本学部建築学科OB(9回卒)で、㈱建築資料研究社(日建学院)創設者の馬場瑛八郎氏のご厚意により、同会社が経営する那須アルパカ牧場(日本初)のアルパカを母校の学部祭に登場させていただきました。アルパカとふれあうコーナーやキャンパスでの行進は、大好評でした。



〈前号152号の誤記訂正のお願いと

お詫びについて 一編集係より〉

下記の通り、誤記がありましたので訂正をお願いするとともにお詫び申し上げます。

ページ(6)見学会のタイトルと筆者名

(正) 建築設計演習Ⅲ 建築作品見学会報告

渡部和生先生の作品見学会に参加して

建築学科3年 佐々木慶明